

中学校固定制難聴学級 50 年の変遷（4）

—2000 年～2017 年（第 4 期） 難聴学級生徒を主体とする多様な取組—

高井小織

（京都光華女子大学 健康科学部 医療福祉学科 言語聴覚専攻）

KEY WORDS: 聴覚障害 思春期（中学校） 学校文化

1 問題の所在と目的

1968 年、京都市立 A 中学校に学年別固定制難聴学級が設立され、50 年が経過した。50 年間の入級生徒数は 328 名、1 学年平均 6.6 名である。

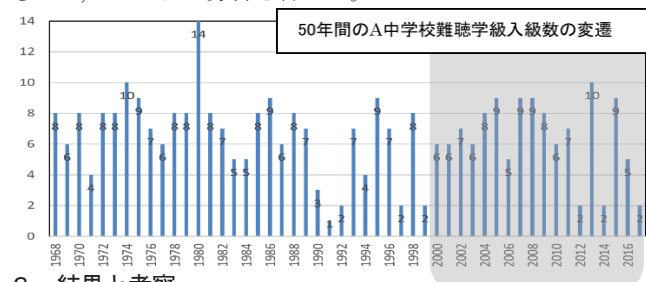
この 50 年を下記のように区分した（2018, 高井）。

	入学年度	テーマ
第 1 期	1968～1977	学級制度の定着と補聴援助機器の重視
第 2 期	1978～1984	ピアグループ活動の始まり
第 3 期	1985～1999	情報保障の萌芽と広がり
第 4 期	2000～2017	主体的で多様な取組

今回の報告では、第 4 期における難聴学級生徒（以下、難聴生）を主体とする多様な取組に焦点をあてる。

2 方法

校内の資料（研究紀要・学級通信・会議録）と卒業生、元難聴学級担任への半構造化面接を元に、i: 難聴生数（入級前後の経緯）、継続した取組についてまとめた。ii: この中で第 4 期の卒業生 15 名、元難聴学級担任 5 名の面接シートをもとに、カテゴリー分析を行った。



3 結果と考察

① 概要

人数: 2000 年から 2017 年までの 18 年間に入級した難聴生数は、116 名、1 学年平均 6.4 名であり、第 3 期から 0.9 名増加がみられるが、学年別の人数差が大きい。

入級前の教育機関: 第 3 期と比較し、「ことばときこえ」通級からの入級が激増した。

卒業後の進路: 聴覚障害教育加配教員がいる公立高校等と私学高校に約 8 割進学し、聾学校高等部への進学が 45%→19%と減っている。私学や他公立高が入学に間口を広げたことと同時に、難聴生全体の基礎学力が定着したことが推察される。

聴力: 第 3 期と同様、聾学校生徒との差は認められない。

② 難聴生を主体とする多様な取組

i: 教科学習の評価の読み替え規準の作成と実施

教育課程と評価評定は普通学級に準じ、音声情報が大きく関わる「国語・音楽・英語」について、「評価読み替え規準」を作成した。

音楽科では音程について「評価しない」、英語科では、定期テスト等のリスニングは同一時間内で原稿を速読するなど

が記載されている。具体的方法や手段で練習することにより、高校受験時にも有効な手段になった。

ii 交流学習

普段はそれぞれの学年のフロアにある各難聴学級教室で教科授業を受ける。体育実技は年間を通じて普通学級との合併授業を行う。

年度当初に同学年 3～4 クラスある普通学級に均等数分かれ交流学級を決定する。様々な種類の活動は、形態や目的に応じてどの集団を拠点に参加するのかを判断した。

教科では年間 3～8 週間の交流学習を行った。年度前半の目的は「全員が普通学級での授業を経験し、課題を確認する」である。年度後半は、12 月に進路希望を含めて三者懇談をし、『長期交流』を個別に計画立てた。部活等で交友関係を培い高校進学を希望をする生徒は 7～8 週間、逆にこの期間に少人数で丁寧な指導を希望する生徒は 2～3 週間の短期間で行うこととし、選択の幅を設けた。

学年の普通学級とは日常的に同じ行動範囲で過ごし、また学活・総合的な学習・学年行事でも計画的に交流活動が行われた。特に中学生が多く、時間を費やす部活動では、幅広い選択肢の中から活動を選び、チームプレイの中で相互のコミュニケーションが広がる例が多くあった。

iii: 情報保障

行事・集会時には、スクリーンに映す文字情報と音声併用の手話通訳を用いた。また、音響機器にも配慮する。入学時には各生徒に磁気ボードを配布し、学校生活の中で場面を選び、自ら使用できるように支援する。二つの留意点として、難聴生自らが情報機器の準備片付けをする等、情報を自ら得ようとする姿勢を培うことと、難聴学級担任のみが情報保障をするのではなく、情報提供者が行うこと、を挙げる。

iv: 多様な集団の提案と実施 サマーキャンプと文化祭

夏季休業中の「サマーキャンプ」は、全学年の難聴生と校外の聴覚障害のある中学生、手話部などの聴生等 20～30 名程度の参加者で実施した。場所は、野外活動施設その他、聴覚障害者総合福祉施設などを 3 年サイクルで利用した。生徒が参加者全員の前でスピーチし、ディスカッションをする「ミーティング活動」や、卒業生を含む大学生ボランティアとの交流などが特徴的である。

体育的活動を交流の中で位置づけることと対照的に、文化祭は難聴学級の自立活動として位置づけた。音楽発表会では、和太鼓や器楽演奏・サインダンスなど、リズムや体感を楽しむ音楽的な活動を発表している。又 2002 年より毎年、聴覚障害に関わるテーマで手話劇を演じた。難聴生だけでなく希望する他学級の生徒とミックスグループで取り組んだ。また、生徒会主体で全校手話コーラスを企画・練習し、文化祭最終日に吹奏楽部の伴奏のもと演奏した。

iv: 考察 単に一方的な情報保障だけでなく、難聴生が情報の発信者になり、インタラクティブなやりとりを意図した提案が学校文化に影響した。また内容や目的に応じた複層的な集団の中で運用する言語に焦点を当てることで、義務教育後の進路選択や生きる力に繋がる取組を試みた時期であった。

参考文献: 「難聴学級 30 年の歩み」「人権教育で育む豊かなつながり 2009」校内研究誌等

インフォームドコンセントについて

本研究について当該校へ説明し、学校長の同意・協力を得ている。